

日本臨床検査自動化学会第 47 回大会

松尾 収 二*

平成 27 年 10 月 8 日(木)~10 日(土)、パシフィコ横浜にて「日本臨床検査自動化学会第 47 回大会」が開催された。大会長は山舘周恒氏(日本大学医学部病態病理学系臨床検査医学分野)であった。氏は臨床化学のエキスパートであり、長く大学病院の臨床検査部門の運営に携わっておられる。

大会のメインテーマは「最新テクノロジーズを駆使して医療をリードする臨床検査」であった。一般演題は 350 題で例年とほぼ同数のエントリーがあった。大会参加者数は 2585 名、併設された展示の見学登録者は 7980 名であり、合計 1 万人を超える我が国最大の産学協同の学会・展示であった。

学会の花は一般演題である。350 演題の内訳は、試薬や機器の検討から、精度管理、検査データの読み方、システム構築まで多岐に及んだ。自動化学会だからと言って試薬や機器の発表ばかりではない。近年の臨床検査の発達と並行して広範な領域が扱われるようになっている。

もう一つの本大会の特徴は技術セミナーである。当学会には 4 つの技術委員会が設置されている。科学技術委員会、遺伝子・プロテオミクス技術委員会、POC 技術委員会および血液検査技術委員会の 4 つの委員会が学会初日の 18 時~21 時(一部 21 時 30 分)にセミナーを開催している。今回も満員の参加者であった。日常検査で問題となっている課題を取り上げるとともに、POCT や遺伝子検査の機器や試薬に直接触れて学修するプログラムもあり、好評を博した。

特別講演は天皇陛下を手術された天野 篤先生

(順天堂大学医学部)で「良い医療の受け方—医師として大切にしていること、伝えたいこと—」のタイトルでお話があった。臨床医として、患者の状態を十分に観察し、鍛えた技術でアプローチされている姿には感銘した。我々と分野は異なるが、プロとして臨床を大事にされていることが十分伝わった。

教育講演は「臍帯血幹細胞をめぐる過去・現在・未来」(麦島秀雄:前日本大学医学部)、「共用基準範囲の設定と運用—国内の取り組みと世界の動向」(市原清志:山口大学大学院医学系)および「ゲノム医療実現における現状と将来展望」(久保充明:理化学研究所)の 3 題あり、いずれも最近の話題が取り上げられた。特に市原先生の教育講演の内容は我々臨床検査業界の大きな目標であり、臨床検査が診療の現場で本格的に使われ始めて数十年、やっとここまで来たかという思いである。標準化の先にあるものは、ビッグデータによる患者情報の解析とその結果の共有・活用であり、もう一つは医療経済における効率化である。いずれも有益性は計り知れない。

シンポジウムは 4 テーマが設けられた。私はその一つを日本臨床衛生検査技師会長 宮島喜文氏とともに司会したので紹介する。テーマは「自動化の更なる躍進が期待される分野を探る」であり、大会全体のテーマを取り上げたものであった。3 演者がそれぞれ「臨床検査データ解析システム—ビッグデータの活用—」(高知大学:片岡浩巳)、「技術革新が進む微生物検査の現状と将来」(東

*天理医療大学医療学部臨床検査学科 shuji-m@tenriyoroze-u.ac.jp

京医科大学：大楠清文)および「最新テクノロジーにより変貌する病理検査」(新渡戸短期大学：廣井禎之)と題して口演された。片岡氏はビッグデータの中で臨床検査は重要な位置を占めており、解析は臨床検査技師の重要な仕事であることを強調された。大楠氏は遺伝子解析や質量分析を取り入れた検査が迅速診断のみならず施設間差の是正につながることを提示された。またコロニーの画像処理による新たな同定の方法も紹介されたが、最後に臨床検査室が臨床医とともに診断や治療に参画していくことの重要性を強調されたことが印象的であった。廣井氏は、全国いずれの施設でも同じような標本の質が保たれる技術の確立が必要であることを強調され、自動染色装置や *in situ* hybridization の自動化の流れ等を紹介されたが、最終的な標本の善し悪しの判断は人の眼であり、そのための技量が求められることを強調された。今後、遠隔診断の普及が予想される中、臨床検査技

師の役割は大きいと感じた。

その他、ランチョンセミナー、サテライトセミナー、はたまたモーニングセミナーなど、勉強するための多くのプログラムが設けられていた。また展示場では検査の機器や試薬以外に、多くはないが、会社間の取引のために機器の部品や試薬の成分を開発している企業も参加していた。大変、新鮮な気持ちで勉強できた。

大学にいと、臨床検査の現場で働いていたときに比べ、臨床検査の情報は乏しい。今回の学術大会への参加は、私をリフレッシュさせただけでなく、研究のテーマをさがすのにも有益であった。臨床検査関係の学会・研究会は数多いが、その中でも本大会はメジャーな産学協同の学術集会である。いわゆる基礎研究の発表は少ないが、実学から学べることは多い。一度は参加されることを勧めたい。

